

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

特別なスポーツファンでもない私がスポーツを観戦するのは、スポーツとして観ているのではなく、ヒューマン・ドキュメンタリーとして観ているからである。おかげで、いまだにルールに通じていない。それでも面白いのは、テレビ放映によって顔の表情までとらえることができるようになり、それを観るだけでも興味がつきないからだ。

スポーツ選手の三十歳は、もはや立派にベテランである。だから、① 普通の人の三十歳の顔でなく、四十、五十代の人の顔 になっている。その結果、二十歳のときよりも美しくなっている選手が、競技の面でも強い。おそらく、人間の顔の美しさの要因の一つが、自信にあるからではないかと思っている。

これ以外にもう一つ、② スポーツの観戦に私を引きつける理由 がある。それこそヒューマン・ドキュメンタリーとして観る理由なのだが、何が勝利の原因になるのか、ということを考えさせてくれるからだ。

スポーツでも歴然と、強いチームなり強い選手なりは存在する。大量得点とか圧倒的な力の差を示して、勝つというタイプである。

こうなると、ちょっとしたエラーや失点は帳消しにしてしまいうくらいのパワーの差異だが、これならば勝つのは当たり前だから、私も常のスポーツファンと一緒に熱狂していればよい。

興味をそえられるのは、別のケースである。

強いチームでも選手でも、必ず好不調があるものだが、不調を彼らはどのように処理しているのかを観察しはじめるや、単なるスポーツ競技もヒューマン・ドキュメンタリーに一変するのである。

不調のときでも、どうやって彼らは、勝ちを継続させているのか。

スランプに陥っていることが最も明らかにあらわれるのは、攻撃面だろう。A、思うように得点できないということである。③ このような場合にまず第一に考えるのは、防衛を固め るということにちがいない。

B、不調とは、一面だけではなく全般的に不調ということだから、オフセンスにとどまらずディフェンスも不調なのはその当たり前で、こちらは得点できないのに相手には点を入れられるという結果に終わりやすい。

これだと負けるしかないのだが、強いチームだとそう簡単には負けない。日本語だと、辛勝、というやり方にしても勝つ場合が多い。つまり、やっとなら勝った、というわけだが、それでも勝利にはちがいないのだから、勝ちを継続させるという最終目標には適っているのである。

それで、どうやって辛勝にしても勝ったかだが、私の観察するに、I という ことのように思う。アメリカのバスケット界の雄であるマイケル・ジョーダン、不調の日はとくにだが、相手のファウルで得たフリースローを、絶対と言ってよいくらいにははずさない。イタリアのサッカーチームのように、大切な試合でそれをはずすこと多しときは、ワールド・チャンピオンなどは夢である。

フリースローなのだから、もはや完全に個人の精神の問題で、④ 「技」よりは「心」で決まることだ と思う。勝利への確固とした意志が、有るか無いかの問題ではなからうか。

C、ミスをしないうように心がける態度は、スランプの期間を生き抜くには効果ある戦法ではあっても、いつでもこれでは何も産まない。スポーツならば、※ 覇者にはなれない。人間

ならば、成功もしなければ失敗もしないという感じで、悪くすれば、一生※うだつが上がらないで終わってしまいがちだ。□  
D、ミス回避主義とは、人間の生き方としては気の※滅入る生き方で、喜びは産まないからである。喜びがなければ、人は従いてこない。

II

人間生活も、スポーツ競技に似ているような気がする。負けつづけは、ほんとうにいけませんよ。人間、それに慣れてしまつて、負けているということすら自覚できなくなってしまうのだから。

( 塩野七生 『不調のときはどうするのか』 一部改変 )

※(文中のことばの意味)

覇者 : 競技などの優勝者。

うだつが上がらない : いつも上をおさえられていて、よい境遇きようぐうになれないこと。

滅入る : 積極的に取り組む元気を失い、ゆううつになる。

問1 A D にあてはまることばとして最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

さい。

- ア つまり      イ ところが      ウ ただし  
エ なぜなら    オ あるいは

問2 ———線①「普通の人の三十歳の顔でなく、四十、五十代の人の顔になっている」とありますが、それはどういうことを表していますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア スポーツの経験を積むことによつて、技術や判断力がすぐれたことを表す。

イ 他人より多くの運動量をこなすことによつて、普通の人より疲れていることを表す。

ウ スポーツをすることによつて美しさがまさり、長年の間成長してきたことを表す。

エ スポーツを続けてきたことによつて、年相応の成長をすることなく老けていることを表す。

問3 ———線②「スポーツの観戦に私を引きつける理由」と

ありますが、その理由にあたるところを文中から二つ探し、それぞれ二十三字以上三十字以内でぬき出しなさい。句読点なども字数に数えます。

問4 ———線③「このような場合」とありますが、どのような場合ですか。文中のことばを使って、十五字以内で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問5

I

にあてはまることばとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ミスをする事で勝ちにつながる
- イ ミスをする事で負けにつながる
- ウ ミスをしない事で勝ちにつながる
- エ ミスをしない事で負けにつながる

問6

線④

『技』よりは『心』で決まることだ」とありますが、それはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア チームの技術よりも、個人の精神の持ち方で、勝利をつかむことができるということ。
- イ 個人の持つ技術以上に、勝利への強い思いの有る無しが、勝敗を分けるということ。
- ウ 個人が高い技術を持っていても、不調の時は、勝利への意識が持続できないということ。
- エ 自分の技術よりも、相手に対するプレッシャーのかけ方次第で、勝利が転がりこんでくるということ。

問7

II

ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 勝ちを拾ったと言われようがまずはファウルで不調を切り抜け、好調が戻ったと勝手に勝利の喜びによって圧勝を獲得すべきなのだ。
- イ 勝ちを拾ったと言われようがまずはミスをしないように心がける態度で不調を切り抜け、好調が戻ったと勝手に失敗の反省によって圧勝を獲得すべきなのだ。
- ウ 勝ちを拾ったと言われようがまずはスランプで不調を切り抜け、好調が戻ったと勝手に相手の不調に乗って圧勝を獲得すべきなのだ。
- エ 勝ちを拾ったと言われようがまずはミス回避主義で不調を切り抜け、好調が戻ったと勝手に好調の勢いに乗って圧勝を獲得すべきなのだ。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

滝さんという漁師がいた。三十代半ばの大きな体の漁師であった。

体が大きいばかりでなく、大変な力持ちで、働き者だった。ほうぼうの※網元から声を掛けられていたが、口数が少ない滝さんは、①独りでの漁を好み、チャカと呼ばれる、エンジンをかろうじてつけただけの小さな※伝馬船に乗り、毎朝、真っ暗なうちから漁に出ていた。

チャカで漁をする、ということとは、獲物は限られている。そんな小さな船では大がかりに網を使うことはできないし、釣り竿を使っていては、自分が食べる分を捕るぐらいならいいが、市場に出すまでのことはできない。残されているのは、大きな銚を使う漁である。

狙うのは、カジキである。カジキは、一本揚げると、いい値がついた。

時々、船を降りた熟練の漁師が一発の小遣いかせぎにそんな漁をやることがあったが、毎日の生業aにしている漁師はまじいかなかった。沖のカジキには、余程勘が良くないと出会えなかったし、何よりも危険であったからだ。カジキの鋭い槍やりのような嘴くちばしは、伝馬船ぐらいたったら船底を突き通した。独り者の滝さんだから、そんな狩りのような漁を選べたのかもしれない。独り者といっても、岸壁から歩いて10分くらい奥まった、三福寺という山寺の近くに母親とふたりで暮らしていた。大きな銚を肩かたにかついで帰っていく滝さんの姿を見かけることがよくあったし、家の前を通ると、滝さんが庭でその銚を手入れする姿もよく見られた。

黒くて大きな鉄の銚は、何回もカジキを射すと、根本がゆる

んで、がたがたになる。それをはずし、根本の木を削り直し、もう一度銚をはめ込み、太い釘で留めるのである。

長い木の先に鉄の銚をはめるには、技術と力がいった。

Ⅰ そうすると、落ちた衝撃で一番上にある重い銚が自分の重さでより深く木の部分にくい込む。

Ⅱ それ以上進まなくなったら今度はその黒い銚を天に向け、垂直に立てる。

Ⅲ それを何度かやって、はじめて、釘で留めるのである。

Ⅳ まず木の先端を銚の受けの部分にぎりぎり押し込む。  
Ⅴ そして、木の柄を持ち思い切り高く揚げ、一気に手を離してそのまま地面に落とす。

滝さんは、その作業をいともやすやすとこなしていた。

その脇では、体の小さい母親が、鱒やイワシのひらきを天日干ししていた。

※ 下戸で、大人衆のつきあいのできない滝さんも、子供たちの相手はよくした。なかでも家が近所で赤ん坊の頃から知っている洋次には、ことあるごと、釣りの道具をこしらえてくれたり、駄菓子だがしを余分に買っては、持ってきてくれたりした。

滝さんは洋次が学校から帰る頃にはもう漁を終え、岸壁でタバコを吹かしながら、海を見ていることが多かった。そこは、海辺を廻まわって帰るのが好きな洋次が滝さんと出くわす場所でもあった。

滝さんは、洋次を見つけると必ずランドセルごと抱きかかえ、軽々と高くまで持ち上げ、ほら放り投げるぞーと言っては、本当に海の方に A 投げてみせた。洋次の目には青い空と、そ

の下のさらに青い海しか見えなくなり、いつも **B** するのだが、次の瞬間、滝さんの大きな柔らかい手でもういちど捕まれて、**C** 地上に降ろされるのであった。

力持ちの滝さんは近所の女衆からも頼りにされていた。山の神さんのお祭りに酒の一斗樽をどうやって運び上げようかという時に、黙ってそれを担ぎだして、**b** あれよあれよという間に、山を登ったのも滝さんだった。

そろそろ梅雨入りも近い、日曜日の昼過ぎのことであった。

洋次が昼ご飯を済ませ、ごろごろ漫画の本をみていると、外 **c** にわか騒々しくなった。近所の人たちがみんな家の前の道に出ている様子である。

洋次の母親が台所の勝手口から、真つ先に外に出た。隣のおばさんと話す声が聞こえる。すると、今度は玄関から慌てて入ってきて、「**②** 滝さんが大げがしたようだよ」と、叫んだ。

洋次は飛び起きた。そして、姉と一緒に道に出た。

どのうちからも、人が出ていて、それは滝さんの家のある山の方まで続いていた。なかには走って滝さんの家まで行こうとしている人もいた。

「滝さん、」洋次も心配になって、そつちへ行こうとすると誰かに肩をつかまれ、戻された。父親だった。

「滝さんどうしたんだ」と聞くと、銚が刺さったと言った。長さが自分の背丈もある黒い鉄の銚を思い出して、洋次はぞつとした。

そんなとき、山からの道がいつそう騒がしくなった。首を出して覗くと、一台のリヤカーが4く5人の大人に押されてすごいスピードでこちらに向かって来る。よく見ると、荷台を前にしたリヤカーには、男の人が乗せられていた。滝さんだ。

滝さんは足を投げ出し、上半身を立て、両手でリヤカーの左

右をつかんでいた。そして **D** いう轟音が近づくとつれ、投げ出した片方の太股に、いつもかっついていいる黒い銚が刺さって、斜めに貫いているのがわかった。

道の両脇の人たちは、「滝さん、しつかりおし」とか「がんばるんだよ」とか声を掛けていた。なかには「やだよ、滝さん」と涙を流しているお婆さんもいた。

リヤカーの木の床はもう血の海であった。道にもたくさん流れ落ちていた。滝さんの年老いたお母さんも青い顔をして、小走りに遅れながらついてきている。洋次の目の前を、リヤカーは一瞬のうちに通り過ぎ、走り去った。

岸壁には、近所の網元の漁船が待っていて、沼津まで滝さんを運ぶらしい。村には医者がいなかった。

滝さんに乗せたリヤカーが見えなくなっても、道の両脇に出ていた人々はしばらく家には入らず、みんな口々に滝さんの安否を気遣った。洋次も、家に入る気にとでもなれなかった。かといって、誰かと話をする気にもならなかった。**③** いま見たこと **④** ながらもあまりにも衝撃的だった。

どうやら、滝さんが庭で銚のがたを直している最中、あの銚の柄を地面に打ち降ろす段で鉄の矢がはずれ、運わるく右の太股に跳ね落ちて足を貫いたということらしい。滝さんの近所の人がお婆さんたちに話しているのが洋次にも聞こえた。

洋次の目には、いま見た光景が焼き付いていた。太股に生々しく刺さった黒く光る鉄の銚、おびただしく流れる血。しかし、**④** 一番深く刻み込まれたのは、別のものだった。

リヤカーに乗せられた滝さんは道の両脇の人たちに向かって、とてもすまなさそうな顔で何回も何回もおじぎをしていた。

「こんな騒ぎになってしまつて……」「どうか心配しないでくんなさい、」滝さんはそう言っているかのように、口をうごか

しては、首を左右に振っていた。それでも、時折、我慢しきれなくなるのか、痛そうな表情を見せたが、また知っている顔を見ると、そんな表情を隠し、おじぎをするのだった。

それから、しばらくして、4時間近くもかかった手術のことや、もう、歩くことも不自由で船には乗れないんじゃないかという噂が洋次の耳にも聞こえてきた。

母親にそのことを訊ねると、⑤「そんな縁起でもないことを言うんじゃない、と激しく洋次を叱った。」

まもなく、夏がやって来た。

民宿をやっている家だけでなく、夏場は村中が活気づく。洋次たちもいつもの夏休みのように毎日御浜に泳ぎに行き、真っ黒になった。

滝さんは沼津の病院に入院したままのようだった。

洋次も時々、三福寺にクワガタを捕りに行くときなど、滝さんの家の前を通ったが、庭はしんとしていて、雨戸がたててあった。いつもは干してある魚のひらきも、洗濯物も出ていなかった。滝さんち、どうなるんだろうと思っただけで、誰にも聞いてはいけなような気がして黙っていた。

夏が過ぎると、※喧嘩が嘘だったかのように静かな村に戻り、浜風が吹き始めて、二学期が始まる。あの毎日がお祭りのような日々は来年の夏までやって来ない。

9月の中旬頃のことである。

洋次が、いつものように海辺にそって学校から戻ってくると、岸壁のロープ止めの杭に足に包帯を巻いた人が座っていた。脇には松葉杖がおいてある。

滝さんだ、洋次はすぐわかったけれど、⑥「なかなか近づけな

くて、のろのろしていた。すると、滝さんの方が洋次を見つけた。」

「おー、洋次」と言うと、こっちへ来いという仕草をする。

⑦「洋次はおそろおそろ近づいた。」

側によると、ひげの伸びた顔で滝さんは洋次をE見た。洋次も見返した。滝さんは随分痩せたように見えた。違う人に見えた。

次の瞬間、洋次の体は空中にあった。滝さんは座ったまま、洋次を空に向かって軽々と抱き上げたのだ。

そして、⑧「ほうら、海に放り投げるぞー」と笑いながら言った。

洋次の目には、いっぱい青色が飛び込んできた。

（佐藤雅彦 『砂浜』 一部改変）

※（文中のことばの意味）

網元 … 漁船や網を持っていて、多くの漁師を使っている人。

伝馬船 … 荷物を陸揚げする時などに使う小舟。

下戸 … 酒の飲めない人。

喧嘩 … 物音や人声のうるさく騒がしいこと。またそのさま。

問1 〓線 a ～ c の文中における意味として、最もふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 生業

- ア 生き生きとした仕事
- イ 生活するための仕事
- ウ 生まれながらの仕事
- エ お金を生み出す仕事

b あれよあれよという間に

- ア あの樽とあの樽を運んでという指示を聞く前に
- イ 思いがけないことに女衆があわてているうちに
- ウ 女衆が相談に夢中になってしまっているうちに
- エ 山の神さんのお祭りの準備で忙しくなる前に

c にわかに

- ア 急に
- イ さらに
- ウ 逆に
- エ とくに

問2 〓線①「独りでの漁を好み」とありますが、その理由としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 他の漁師とコミュニケーションをとることが苦手だから。
- イ 自分本位な性格で、漁師仲間から嫌われていたから。
- ウ 大勢で漁をするよりも、一人の方が好きにできるから。
- エ 危険を伴うカジキの漁は、己の勘を働かせるものだから。

問3 本文の〈Ⅰ〉～〈Ⅴ〉を正しい順番で並びかえると、どのようなになりますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 〈Ⅳ〉↓〈Ⅱ〉↓〈Ⅰ〉↓〈Ⅲ〉↓〈Ⅴ〉
- イ 〈Ⅳ〉↓〈Ⅴ〉↓〈Ⅰ〉↓〈Ⅱ〉↓〈Ⅲ〉
- ウ 〈Ⅳ〉↓〈Ⅰ〉↓〈Ⅱ〉↓〈Ⅲ〉↓〈Ⅴ〉
- エ 〈Ⅳ〉↓〈Ⅱ〉↓〈Ⅴ〉↓〈Ⅰ〉↓〈Ⅲ〉

問4 〓線 A ～ E にあてはまることばとして最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア ドドドツと
- イ ふわつと
- ウ すとんと
- エ ひやつと
- オ じつと

問5 ———線②「滝さんが大けがしたようだよ」とありますが、滝さんはどのようにしてけがをしたのですか。そのことを表している一文を文中から探し、初めの五字で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

ウ まわりの人の噂をすぐに本当だと思うことは、良くないことだから。  
エ 良くないことを口にすれば、その通りになってしまう気がしたから。

問6 ———線③「いま見たことがあまりにも衝撃的だった」とありますが、どのようなものを見たのですか。具体的に書かれている一文を文中から探し、初めの五字で答えなさい。

問9 夏がやって来て、洋次にとってはいつもの夏休みでも、滝さんにとってはそうではないことは、どのようなことよってわかりますか。そのことを表しているところを文中から探し、五十字以内でぬき出し、初めと終わりの五字で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問7 ———線④「一番深く刻み込まれたのは、別のものだった」とありますが、どのようなことを「一番深く刻み込まれた」のですか。文中の言葉を使って五十字以内で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問10 ———線⑥「なかなか近づけなくて、のろのろしていた」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

問8 ———線⑤「そんな縁起えんぎでもないことを言うんじゃない」と母親が洋次を激しく叱った理由として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 滝さんが事故にあったということを、まだ信じられないでいるから。  
イ 力持ちで働き者の滝さんは、すぐに良くなるんだと信じているから。

ア 重傷を負った滝さんに対して、どのように接してよいかわからなかったから。  
イ 滝さんに、また海に向かって放り投げられることを想像して恐怖を感じたから。  
ウ 滝さんだとすぐに気づいたが、自分から声をかけるのは何か違う気がしたから。  
エ 変わり果てた滝さんに、簡単に声をかけてはいけない雰囲気を感じ取ったから。

問11 ー線⑦「洋次はおそるおそる近づいた」とありますが、この時の洋次の感情の組み合わせとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 不安 当惑  
イ 心配 悲嘆  
ウ 恐怖 歓喜  
エ 後悔 興奮

問12 ー線⑧「ほうら、海に放り投げるぞー」と笑いが言った」とありますが、ここから滝さんのどのようなことがわかりますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 滝さんはけがをする前と同じように洋次と接しているが、彼自身何かが変わってしまったということ。  
イ 滝さんは痩せてしまっただけで、けがをする前よりも力強く、明るい様子になっているということ。  
ウ 滝さんは大きなけがをしてしまったが、洋次に対して以前と変わらない態度で接しているということ。  
エ 滝さんはけがをしてしまったことによって、外見も中身もすっかり違う人になってしまったということ。

問13 この話の中での滝さんは、どのような人物として描かれていきますか。その説明として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 洋次にはとても親切だが、他の人間とはうまくつきあえない、真面目で頑固な変わった人物。  
イ 洋次が幼い頃からずっと親しみを持っている、誠実で心優しい兄貴のような人物。  
ウ 子供である洋次と趣味や興味を合わすことができる、素直で愛想の良いつきあいやすい人物。  
エ 洋次が困ったときはいつでも助けに来てくれる、力持ちで頼りがいのある勇敢な人物。

三 次の二つのことわざが同じ意味になるように、に  
あてはまることばを答えなさい。

- ① 転ばぬ先の杖  をたたいて渡る
- ② 豚に真珠  猫に
- ③ 雲泥の差  とすっぽん
- ④ 踏んだり蹴ったり  泣き面に
- ⑤ 猿も木から落ちる  の川流れ

四 次の            線のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

- ① 生まれコキヨウに帰る。
- ② 教室でタイキする。
- ③ 手間をハブいて仕事をする。
- ④ 税金をオサめる。
- ⑤ 状況の変化にタイオウする。
- ⑥ せきによく効く薬。
- ⑦ 礼儀作法を学ぶ。
- ⑧ 裏の畑を耕す。
- ⑨ 十分に熟れた柿をかき。
- ⑩ トラックで砂利を運ぶ。

これで問題は終わりです。